

私は化学研究所若手研究者国際派遣事業の支援を受けて、ドイツの Regensburg 大学に一ヶ月間滞在させていただきました。滞在先の研究室は、立場に関係なくいつでも気軽に議論するような、とても良い雰囲気をもった研究室でした。そのような研究室に滞在した中で特に勉強になったと感じた点をいくつかお伝えしようと思います。

一つ目は、「研究相談が議論を含めて全て英語で行われている」という点です。渡航前は勝手なイメージで、ドイツでは英語が通じるのが当たり前だと思っていました。しかし、滞在した Regensburg がたまたまそうだっただけなのかもしれませんが、街中のレストランやお店ではほとんど英語が通じませんでした。その一方で、滞在先の研究室では学生のほとんどが英語を流暢に話せたのですが、それは、普段から英語で議論しているからだと感じました。いざという時に英語で円滑に議論するためには普段から訓練する必要があるのだと改めて思いました。

二つ目は、「作業の効率化が上手い」という点です。滞在先の方々はもちろん研究が大好きなのですが、家族(または恋人や友人)との時間も同じくらい大事にしています。そのため、朝方に来て夕方に戻る、というサイクルの中で如何に効率的に時間を使うか、ということが非常に上手でした。時間の使い方に対してそのような捉え方をしたことがなかったため、新鮮で、研究生活を見直させられました。彼らのような上手い時間の使い方が Quality of Life を向上させる秘訣なのだと思います。

三つ目は、「コーヒブレイクは全員参加」という点です。コーヒブレイクというのは馴染みがなく、作業を中断させられる不要な存在、というのが渡航前の個人的な印象でした。しかし、いざ経験してみると「皆が一堂に会する場を設けることで自発的な議論が促されている」という利点に気が付きました。もちろんコーヒブレイク中ずっと議論しているわけではなく、むしろ主にサッカーの話をしていたのですが、大事なのは一日に一回は全員と顔を合わせて話をする、というところにあると思います。顔を合わせ普段から仲良く話し合うことで、何かふとした疑問を抱いた時や研究に関して頭を悩ませている時に、気軽に議論し合えるようになります。作業を中断させられる点からやはりコーヒブレイクには慣れませんでした。全員で食事をしたりスポーツをしたりと他にも方法はたくさんあるので、コミュニケーションの重要性を再度認識して研究生活を送ろうと思います。

他にも、滞在先で光学装置について学べたり、ドイツの素晴らしいビールを飲めたり(右の写真はビアガーデンでの一枚です)、おいしいソーセージを食べられたりと、良い思い出は書ききれないほどあるのですが、特に大事だと実感したことを書かせていただきました。

最後に、このような貴重な体験をさせて下さった先生方や事務の方々に深く御礼申し上げます。

